

平成 28 年度 重要文化財公開
首里城京の内跡出土品展「憧れの青花」関連文化講座

第67回 文化講座

「首里城京の内跡出土の青花について」

金城 龜信（沖縄県立埋蔵文化財センター所長）

「中国の青花磁器」

森 達也（沖縄県立芸術大学全学教育センター教授）

「日本の染付」

野上 建紀（長崎大学多文化社会学部准教授）

【日 時】平成 29 年 3 月 25 日(土) 13:00 ~ 16:00

【会 場】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

プログラム

- 12:30 開場
- 13:00 開催あいさつ
- 13:05 趣旨説明
- 13:15 講演① 首里城京の内跡出土の青花について ···· P1
金城 亀信（沖縄県立埋蔵文化財センター所長）
- 14:00 講演② 中国の青花磁器 ···· P20
森 達也（沖縄県立芸術大学全学教育センター教授）
- 14:45 講演③ 日本の染付 ···· P22
野上 建紀（長崎大学多文化社会学部准教授）
- 15:35 質疑応答
- 15:55 閉会あいさつ
- 16:00～パネリストによる展示資料解説

首里城京の内跡出土の青花について

沖縄県立埋蔵文化財センター

さんじょう かめのぶ

金城 龜信

1.はじめに

首里城跡（面積 46,167m²。規模：東西 370 m・南北 213m。14世紀頃に築城。）の京の内跡（首里城内でも最も神聖な聖域。国王の就任や王国の重要な祭祀など重要な儀式が執り行われた。首里森御嶽・真玉森御嶽・京の内之三御嶽と 5つの御嶽で構成。）の発掘調査は平成 6（1994）年度から平成 9（1997）年度迄の 4 年間に、内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 首里出張所からの委託を受けて沖縄県教育委員会が京の内跡の復元整備に必要な遺構確認の為の発掘調査を実施した（第1図）。

京の内跡の 4 年間に亘る発掘調査の内、平成 6（1994）年度から平成 8（1996）年度迄の 3 年の発掘調査を担当し、調査面積は約 4,000m²となった。

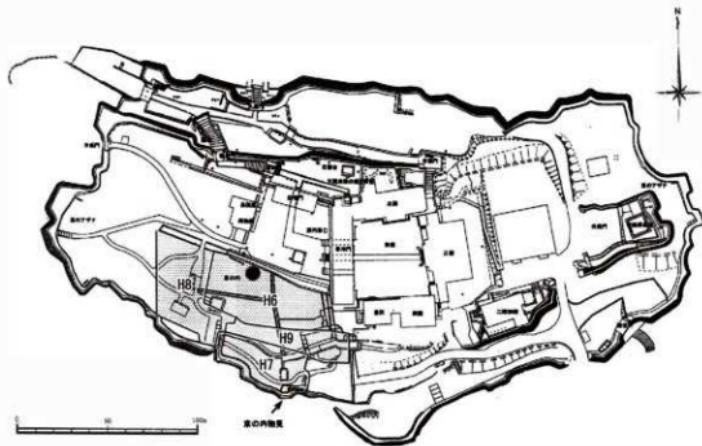
特に平成 6 年度に約 2,000m²の発掘調査を行ったが、調査区の北側部分で火災で焼失をした倉庫跡（土壤 SK01。以下、倉庫跡。または「SK01」と略記する。）が発見された（第1・2図）。

倉庫跡の規模は、東西約 3m・南北約 3m の 9 m²で北側が過去の平成 2（1990）年調査で埋め戻し用の白砂が投入されて埋め戻されていた。倉庫跡に堆積した遺物包含層の厚さは、最大で 50～60cm を有し、焼けた陶磁器の破片を主体とする包含層で土砂の混入は無かった。最終的に出土した遺物は、2 トンダンプの 2・3 台分の量があった。

この倉庫跡の発見で、首里城内で起きた倉庫火災について文献史料で確認したところ『中山世譜』（註1）に記載された 1453 年（尚金福 4 年）に起きた王位繼承の争い「志魯・布里の乱」と『明実錄』（註2）の英宗実錄の天順 3 年 3 月に記載された 1459 年（尚泰久 5 年）の「禮部奏 琉球國中山王尚泰久奏稱 本國王失火 延燒倉庫銅錢貨物 云々（礼部の奏では琉球国王尚泰久の奏称により、本国の王府が失火に遭い倉庫の銅錢、貨物なども全部焼けた 云々。）」の二件の記録があり、遺構の位置関係や出土品などから後者の 1459 年の火災で焼失した倉庫跡と判断をした。

平成 7（1995）年度と平成 8（1996）年度の発掘調査と平行して倉庫跡出土の陶磁器の復元を含めた資料整理を行った。平成 9（1997）年度の報告書刊行を目途に報告書の原稿執筆を行ったが、執筆の最中に文化庁から倉庫跡から出土した陶磁器を国指定とするので個体数を算出するように指導があり、原稿執筆と平行しながら陶磁器類の分類と接合、そして陶磁器の石膏復元が困難な部分を担当し行つた。復元された陶磁器から倉庫跡以外に石積み SA31・32 から出土した陶磁器片とも接合ができた為、火事場の片付けの際に石積み SA31・32 にも陶磁器片が廃棄されたことが判明した。

倉庫跡（石積み SA31・33 を含む）では 1,162 個体（84 個体のタイ産半練土器及びその他の土器と 1,078 個体の陶磁器）が一括で廃棄（註3）されており、その内の陶磁器 518 点（附 金属製品一括、ガラス玉一括）が、沖縄県において戦前・戦後を通して考古資料の部で初めて国の重要文化財として平成 12 年 6 月 27 日付けで指定された（註4）。



第1図 首里城跡京の内地区 年度別発掘調査箇所
(●:1459年に起きた失火で消失した倉庫跡SK01)



第2図 B-15 1459年失火の倉庫跡(SK01)検出直後(左図)と完掘(右図)の状況

2. 京の内倉庫跡 (SK01) 出土の陶磁器について

(1) 出土陶磁器の産地と個体数

倉庫跡出土の遺物の推定個体数は 1,162 個体（註5）があり、タイ産半練土器とその他の土器の 84 個体を除く、1,078 個体が陶磁器の個体数として数えられる。

陶磁器の産地別の割合は、表1のとおり全出土の 92% を中国産陶磁器が占めている。次に中国産陶磁器の総数 993 個体の種類別の個体数は表2 のとおりで、青磁が過半数を占めている。

次いで褐釉陶器、青花（元・明代を含む）の順に漸次減少している。

(2) 中国産陶磁器の器種別個体数

中国陶磁器の青磁・青花を含む 993 個体を器種別にみると表3 のとおりとなる。15 の器種の中で碗類が全体の 1/3 を占めているが、皿と盤の合計を取ると 407 個体 (40.98%) となり碗類を上回る個体数となる点が注目されるところである。次いで壺類が全体の 1/5 弱を占めている。

産地	個体数	割合
中国産	993	92.1%
タイ産	76	7.1%
日本産	6	0.6%
ベトナム産	3	0.3%

表1 陶磁器の産地別個体数

種類	個体数	割合
青磁	609	61.3%
褐釉陶器	178	17.9%
青花	116	11.7%
白磁	75	7.6%
黒釉陶器	7	0.7%
色絵	4	0.4%
瑠璃釉	2	0.2%
紅釉	1	0.1%
褐釉磁器	1	0.1%

表2 中国産陶磁器の種類別個体

3. 京の内跡出土の青花について

(1) 京の内出土の元青花の分類とその後の主な

研究成果について

平成 6 (1994) 年度の発掘調査地区（約 2,000 m²）で出土した元様式の青花は 61 片があり、倉庫跡出土の大合子と馬上杯を含めて推定個体数は 10 個体（註6）が考えられている（第 3・4 図）。次に推定された個体別の器種と個体数は、盤（5 個体）・壺（2 個体）・鉢（1 個体）・馬上杯（1 個体）・大合子（蓋・中蓋・身を個別に数えて 1 個体とする）であった。以下、平成 10 (1998) 年報告書（1）に掲載した器種・分類と文様について略述し、その後の主な研究成果についても掲載した。

ア、元青花（第3図1～9、第4図10）

①盤（第3図1～5）

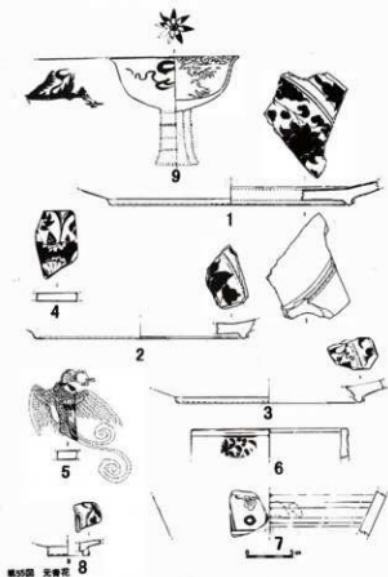
第3図1は牡丹唐草文が見込みに描かれた盤の高台片（高台径 26.3cm、C-12:SA03 栗石より出土）。

第3図2・3も盤の高台破片で、葉文や唐草文がみられることから同図1と同様の牡丹唐草文として考えられる。

器種	個体数	割合
碗類	328	33.0%
壺類	193	19.4%
皿	303	30.5%
盤	104	10.5%
大瓶	5	0.5%
瓶	27	2.7%
水注	12	1.2%
大鉢	4	0.4%
鉢	2	0.2%
馬上杯	3	0.3%
杯	8	0.8%
大合子	1	0.1%
花盆台	1	0.1%
香炉	1	0.1%
小品	1	0.1%

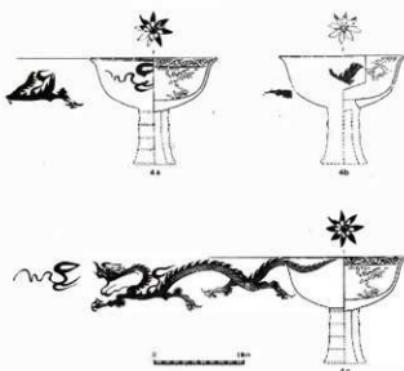
表3 中国産陶磁器の

器種別個体数

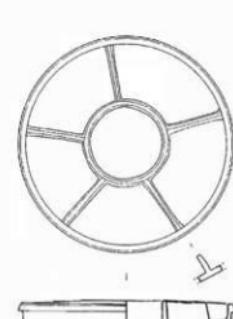


第3図 元青花(1)

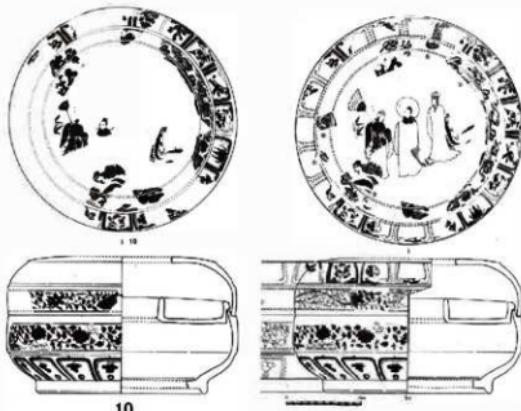
第3図 右図 元青花馬上杯(下之御庭跡出土品の追加資料により復元)



第4図 新資料(下之御庭跡ほか出土品)の追加で復元・修正された重要文化財
青磁(3品)、元青花(4馬上杯)
a: 宝の内底土、b: 下之御庭出土、c: 宝の内と下之御庭の復元図



第5図 元青花(2)



第6図 元青花(2)大合子

第6図 右図 元青花大合子(下之御庭跡ほか出土品の追加資料により復元)

同図2の高台径 23.2cmで、C-11のSS01北側覆土より出土。同図3の高台径は 20.3cmで、出土地点はB-12のSA01覆土より出土。同図4は盤（調査区内表探）の見込みの破片で、蓮池図大盤（註7）か蓮池鷺鳩図大盤（註8）が描かれている。同図5は底面に双鸞文大盤（註9）か鳳凰図大盤が描かれている。

②壺（第3図6・7）

同図6は口頸部（口径 17.2cm。C-14 第1層出土）の破片に二条の界線の間に唐草文とみられる文様を描いている。

同図7は壺の胴下部（C-12 摂乱層出土）にラマ式蓮弁を描き、その内側に如意頭文（垂下文）と丸文（滴）を描いている。

③鉢（同図8）

同図8は鉢の高台破片（高台径 4.4cm。D-14 第1層出土）で見込みに雲文と草花文とみられる文様が描かれている。

④馬上杯（第3図9）

同図9は足となる脚部が欠落した為、類似資料（註10）を基にして比率計算後に復元した資料である。外面口縁に三爪龍と雲文を内面口縁には縁に沿うように間隔の開いた界線を上下に施し、その内側に蔓唐草文を廻らしている。また、胴部には型押しの印花文（龍文）が施されている。見込みにも花文（ひおうぎ文）が描かれている。復元サイズは、口径 14.2cm、高さ 11.8cm、底径 4.7cm と求められている。B-15 SK01（SA20）第2層出土。

⑤大合子（第4図10）

同図10の大合子は、蓋〔復元サイズ：口の直径 30.4cm、蓋甲直径 24.4cm、高さ 7.1cm。B-15 SK01（SA20）第2層。〕・中蓋〔復元サイズ：最大直径 29cm、高さ 3.29cm、底径 27.5cm。B-15 SK01（SA19・20）畦第2層。〕・身〔復元サイズ：外側口径 30.4cm、内側口径 28.6cm、高さ 10.5cm、高台径 22.2cm。B-15 SK01（SA19）第3層。〕の三つで構成された資料（註11）である。

文様は蓋甲に中心となる人物（皇族、地方の国主。頭部の後背に日輪）と日輪とみられる円を描く。左側に付き人（鳥の羽製とみられる团扇を手に持っている）と同伴する人物（マントを羽織る）を描いている。人物の周辺に松、蕉葉文、草文が描かれている。蓋甲上面外周には区画帯の界線の中に波濤文を描き、波濤文の外側には下向きのラマ式蓮弁文を描いて、蓮弁文の弁内に八宝文（珊瑚、陰陽板、銀鏡、火災宝珠が残存。）と樹花木を描いている。この八宝文直下に花唐草文（花の種類が射干と判明）が描かれている。

中蓋内側には板状に加工した陶土を蓋の中心に輪状に貼り付けて仕切りを作り、輪状の仕切りを中心にして仕切りの陶土を5箇所に貼り付けている。次に身の口縁部には菊唐草文を描き、その直下にラマ式蓮弁文と垂下三葉文および滴文を描いている。

以上が平成6年度の京の内地区から出土した元青花である。近年の研究成果では、特に亀井明徳を中心とした亞州陶磁学会の会員によるものが目覚ましい（註12）。亀井らの研究成果から以下に引用記載すると、上記した第3図1の盤は青花宝相華唐草文盤（註12）、同図2の盤が青花蕉葉石果文盤（註12）に、同図3の盤は青花果文盤、同図4の盤は青花蓮池鷺鳩文稜花盤（註12）、同図5が青花鳳凰文盤（註12）、同図6の壺の文様も青花射干唐草文罐（註12）と同図7の壺の文様も蓮弁内の文様

を2連雲文と丸文の名称（註12）が冠されている。第3図8の鉢に描かれた文様は景德鎮珠山出土の青花蓮池鷺文碗と類似していることが判明している（註12）。

第3図9の馬上杯については、亀井明徳が類似資料の特徴である内面に印花文、内底に「射花（あやめ科の「ひおうぎ」）」や三爪龍文・口縁の唐草文から香港個人蔵品（葉佩藍1998図140、口径13.3cm）とアメリカの個人蔵品（Lee J.G.1950、口径13.7cm）を掲げている。また、亀井は描写方法に類似する資料として中国南京市北郊中央門外にある呉頴墓1件（口径12.9cm）の資料〔墓主は、洪武12（1379）年に没し、葬年はこの年以降（考古1972-4.pp.31-33）〕をあげ、内底に簡素化された菊花文の描法類似を指摘している（註13）。その他に亀井明徳は京の内出土の馬上杯の製作時期について洪武年間、それ以降の時期を考えている（註13）。馬上杯の県内での出土例については、京の内資料を含めて首里城跡から3固体（青花龍文高足杯、青花鳳文高足杯、青花花唐草文高足杯）、久米島町宇江グスクから1固体（青花花唐草文高足杯）の計4固体が確認（註14）されている。

第4図10の大合子についても亀井明徳は、「景德鎮窯で、青花が発明された元時代の作品であり、初期のもののみがもっている他人を模倣することなく、（略）力強さが感じられる。この大型の元青花合子は、わが国や中国の出土例はもとより、世界の美術館でも一点も存在しない、きわめて珍しいものである。」（註15）と評価している。ところで、当該大合子の蓋甲頂部に描かれた人物については、亀井明徳・新島奈津子ほかの研究で「男性の服装は宋代の円領（丸い袖元）〈略〉女性の服装は、雲肩（ショール）を肩に被っているようであり、〈略〉丈の長い上衣を着て、下に細かい襞があり文様のほどこされた百褶袴をはいている。裾には縁取りがみえる。右肩には鱗状文様を入れた翳をさえ、小さく結った髪で、右側の男性の方向に顔をむけている仕女である。」とする。また、文様については、「蓋の側面は、同じく圈線の下に変形蓮弁文と射干唐草文を配置している。前者の構成は、花卉文を間にはさみ、雜宝（暗八仙）文である。方勝、盤長、錠、火炎・陰陽板、珊瑚を確認でき、その他に丁子につく紐の一部とみられるものがある。〈略〉射干は開花・円形の蕾・葉文からなり、花芯を白抜きにし、5弁は輪郭を明瞭な線で描き、その線にそって白抜きして、陰影を意図している意匠がみられる。」とする。更に大合子の用途については、「宋代の磁州觀台鎮窯の製品とみられる白磁黒花蓮池文盒があり、その蓋甲に「鏡盒」ときされている。〈略〉「本品の内蓋が5区画されているのは、白粉・紅・黛などの化粧品をいれ、下段に銅鏡が収納されていたと考える。」と記されている（註16）。以上のように京の内跡出土の元青花については、亀井明徳を研究代表とする亞州古陶瓷研究会によって首里城京の内跡の出土資料を（註3）を含む首里城内出土の元青花を詳細な検討と研究がなされている（註16）。

（2）京の内出土の明青花の分類とその後の主な研究成果について

平成6（1994）年度の発掘調査地区で倉庫跡から出土した明様式の青花は推定で114個体（註17）である。次に推定された個体別の器種と個体数は、表4のとおりであった。以下、器種の分類概念と文様等について略述する。

イ、明青花（第5図1～13、第6図14～29、第7図30～36、第8図37～41）

A. 碗（第5図1～13、第6図14～20）

①外反口縁（大振り）碗（第5図1～9）

1群碗（第5図1～9）：外反型の大振り碗で腰部が豊かに丸味を持ってやや外側に開きながら

張り出し、胴上部よりゆるやかに外反させた口縁を作る。I群碗65個体の平均は、口径14.7cm・高さ7.3cm・高台径5.0cm。口径の最小は、13.6cm、最大が16cm。高さの最低は6.7cm、最高が7.5cm。高台径の最小は5.4cm、最大が7.2cmの範囲内を大振り碗とした。

文様構成は胴部の主文様が「宝相華唐草文」・「雲堂手」などの二種類の文様構成があり、これをA～Cまでの三種類に分類し、更に口縁の内外面の文様やその組み合わせなどからI群A類～I群C類の三種類に分けた。なお、I群A類とI群C類の二種類については、文様の組み合わせなどからa～g種までの7種類の組み合わせが認められたが、細片資料のd～g種までは集計のみを実施し、図化は割愛した。また、紙数の関係上、文様が把握しやすい資料を整理して掲載した。

I群A類：胴部の主文様が「宝相華唐草文」を描くもの。第5図1～4。

a種（第5図1・2）：外面の文様は口縁に界線を一条施し、胴部に「宝相華唐草文」を描く。胴部は二条一組の界線を施している。内面は口縁に界線と「四方禪文」を施し、内底面に「宝相華唐草文」や「梅月文」を描いているものである。中には「月文」を忘れて「梅文」のみを描いたものもある。同図1の復元されたサイズは、口径14.0cm・器高7.0cm・高台径5.9cm。同図2が口径16.0cm・器高7.4cm・高台径6.2cm。

b種（同図3）：内外面の文様構成は基本的にa種と同じであるが、外面の口縁に二条一組の界線が追加され、三本の界線となるものである。推算口径14.4cm。

c種（同図4）：文様構成は両面ともa種と同じであるが、外面の高台脇と高台際に各々一条づつ界線が追加され腰部から高台までに四本の界線が存在する。内底面に片切り彫りによる陰圈線が施され、その内側に圈線と「梅月文」を描いている。同図4の復元されたサイズは、口径15.0cm・器高7.3cm・高台径5.4cmであった。

I群B類：胴部の主文様が「雲手文」を描くもの。第5図5。

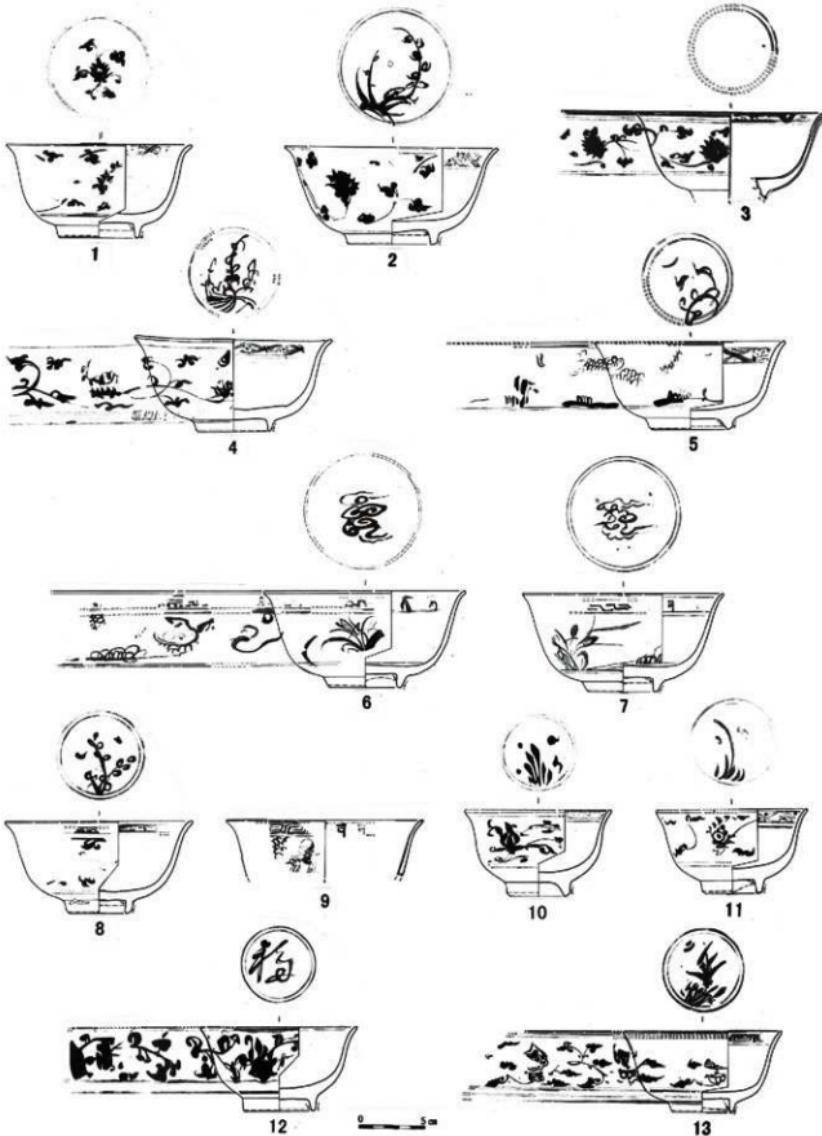
I群B類（第5図5）：外面の文様は口縁に一条ないし二条一組の界線を施し、胴部に「雲堂手」風の文様を描く。腰部には二条一組の界線を施す。内面の口縁には界線と「四方禪文」を描き、内底面に圈線と「梅月文」を描いているものである。同図5の復元されたサイズは、口径14.6cm・器高6.7cm・高台径6.0cm。

I群C類：外面口縁に省略した「雷文」と胴部に「雲手文」や「宝相華唐草文」を描くもの。第5図6～9。

a種（同5図6・7）：外面の口縁に界線と省略化した「雷文」で文様帯をつくり、胴部に「雲堂手」風の文様を描く。腰部に二条一組の界線を施す。内面は口縁に「梵字」様の文様を描き、同文様の上下に界線を施して区画をつくる。内底面に圈線と「如意頭雲文（靈芝雲）」を描くものである。同図6の復元されたサイズは口径15.4cm・器高7.4cm・高台径5.4cm。同図7が口径15.4cm・器高7.5cm・高台径5.6cm。

器種	個体数	割合
碗類	87	76.3%
杯	4	3.5%
鉢	1	0.9%
皿	4	3.5%
盤	1	0.9%
小瓶	10	8.8%
大瓶	3	2.6%
壺	4	3.5%
計	114	≠100%

表4 明様式青花の器種別個体数



第5図 明青花 碗(1~13)

b種(第5図8)：外面の口縁はa種と同種の文様であり省略化した「雷文」を小さく描く。胸部の「宝相華唐草文」は丁寧に描く、腰部は二条一組の界線を施す。内面口縁の文様は界線と「四方擇文」を施している点でa種と異なっている。内底面に圈線と「梅月文」を描くものである。同図8の復元されたサイズは、口径14.4cm・器高7.0cm・高台径4.4cm。

c種(同図9)：外面の口縁に界線と「雷文」を描き、胸部に「雲堂手」風の人物を描く。内面口縁に「梵字」様の文様を描き、上下の界線でもって文様帯とするもの。同図9の推算口径は15.0cm。

②外反口縁(小振り)碗(第5図10～13、第6図14～17)

I群碗(第5図10～第6図17)：I群碗を若干、小型化した小振りの外反口縁碗である。器形は腰部がI群よりも丸味が強くなつてやや内側に閉じ気味に腰下部から立ち上がり、胴上部からゆるやかな外反でもって口縁を仕上げている。II群碗の基準となったサイズは口径の最小が10.8cm、最大で12.6cmの範囲内に収まるものとした。因みに高さの最低は5.8cm、高台径は最小が4.7cm、最大で5.4cmであった。また、II群碗の平均的なサイズは19個体で口径が11.6cm、高さ6.3cm、高台径4.8cmであった。文様については胸部の主文様である「宝相華唐草文」、「松竹梅文」、「如意頭繫ぎ文」などからA・Bの二種類に大きく分けた。口縁の内外面の文様構成などからa～f種までの6種類に細分した。

II群A類：胸部の主文様が「宝相華唐草文」・「四宝唐草文」・「松竹梅文」・「如意頭繫ぎ文」を描くもの。同図10～17。

a種(同図10・11)：外面の口縁に一条の界線を施し、胸部に「宝相華唐草文」を描く。腰部に二条一組の界線を施す。内面の口縁に界線と「四方擇文」で文様帯をつくり、内底面に圈線と「月と草文」、「草花文」などを描くものである。同図10の復元サイズは、口径11.2cm・器高6.6cm・高台径4.8cmで、同図11が口径11.6cm・器高6.4cm・高台径4.6cmを求めた。

b種(同図12)：口縁の内外面に一条の界線を施し、胸部に主文の「宝相華唐草文」を描く。腰部と高台脇に界線を一条ずつ施している。内底面に「福」の吉祥文字を入れて圈線で閉じているものである。同図12の復元サイズは、12.0cm・器高6.3cm・高台径5.4cmを求めた。

c種(第5図13、第6図14)：外面の口縁に二条一組の界線を施し、胸部に「四宝唐草文」を描いている。腰部と高台脇には二条一組の界線を二組施し、更に高台脇や高台外面に各一条ずつ界線を追加している。内面の口縁には「雷文」と界線で文様帯をつくり、内底面に「草文」、「月と草文」を描いているもの。同図13の復元サイズは、12.2cm・器高4.7cm・高台径6.1cm。同図14が口径12.1cm・器高6.4cm・高台径4.7cmと求められた。

d種(同図15)：外面口縁に二条一組の界線を施し、胸部に「松竹梅文」を描く。腰部の界線は二条一組のものを一組施している。内面口縁には「雷文」と界線を描き、内底面に「梅文」を描くもの。同図15の推算口径は12.6cmを求めた。

e種(同図16)：外面の口縁に「雷文」と界線を施し、胸部に「如意頭繫ぎ文」を描く。界線は二条一組のものを腰部と高台脇に二条施している。内面口縁には「梵字」様の文様と界線を描き、内底に「如意頭雲(靈芝雲)」とみられる文様を描くもの。同図16の復元されたサイズは、口径12.6cm・器高5.8cm・高台径5.2cmと求められた。

f種(同図17)：両面の口縁に「雷文」と界線を描き、胸部に「松竹梅文」を描いているもの。同図17の復元されたサイズは、口径10.2cm・器高(推定5.8cm)・高台径(推定4.1cm)。

II群B類：胴部に細線描きの波文と呉須描きの魚と花を描くもの。第6図18。

II群B類（同図18）：一例のみ出土している。外面の界線は一条のみ口縁と腰部に施し、二条一组のものは高台脇に施されている。胴部には細線描きの「波文」と呉須描きの「魚文」と「花文」を描く。内面口縁には「雷文」と界線を施し、内底面に「松と月」を描くもの。同図18の推算されたサイズは、口径11.4cm・器高6.2cm・高台径4.4cmであった。

③内彎口縁（大振り）碗（第6図19）

III群碗（同図19）：本群碗の器形は腰部での丸味がI・II群碗と比較して微弱である。高台脇からゆるやかに丸味を保持しながら口縁部までスムーズに移行する内彎型の大振りの碗。III群碗は2点が得られていて、2点とも口径が16cmと一致し、高さは7.7cmと7.9cm（同図19）、高台径は5.4cm（同図19）と5.6cmのサイズが求められている。文様は2点とも共通し、外面口縁に界線と「波涛文」、胴部に「宝相華唐草文」などを描く。内面口縁は界線と「四方擇文」を描く。内底面には「草花文」と團線を施している。

④内彎口縁（小振り）碗（第6図20）

IV群碗（同図20）：IV群碗のタイプは一点のみ出土している。器形はIII群碗と同じであり、III群碗をそにまま小型化した感じの碗である。サイズは口径が13.0cm、高さは6.1cm、高台径が4.8cmと求められた。胴部の主文様は「水草と泡」を描く。内底面も胴部に描かれた「水草と泡」を描いている。内面口縁には「唐草文」を描いている。

B. 杯（第6図21・22）

口縁が外反するタイプの杯が3片得られている。杯には高台を有する杯と高足杯（馬上杯）の二種類が認められる。便宜的に高台を有する杯をI類として、脚が貼り付けられた高足杯をII類とした。その他に器厚やサイズなどからA・Bの二種類に分類。

①杯I類（同図21・22）：杯のI類は高台を有するもので、厚手と薄手の二種類が認められた。前者の厚手の杯をA種とし、後者の薄手の杯をB種とした。

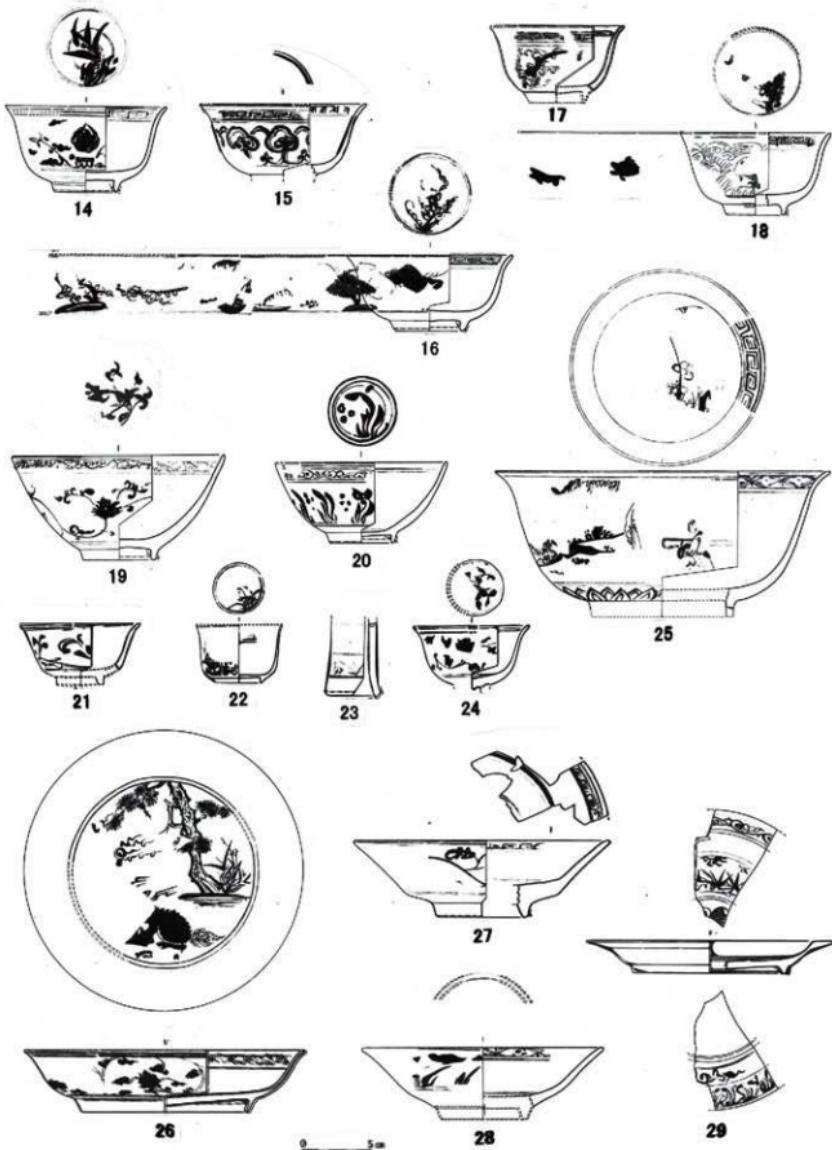
杯I類A種（同図21）：厚手の外反口縁の杯。胴部に「唐草文」を描くものである。腰下部を欠くが厚味や丸味がある状況から高台を保持した杯として判断される。

同図21の復元されたサイズは、口径9.0cm・器高（推定4.8cm）・高台径（推定3.1cm）。

杯I類B種（同図22）：薄手の外反口縁の杯。器厚が1.2mm～2.3mmと非常に薄く仕上げている。胴部に「松竹梅（松竹梅樹文）」を描き、内面の口縁に「四方擇文」を描いている。内底面に「草文」を描いているものである。同図22の復元されたサイズは、口径（推定6.5cm）・器高（推定4.4cm）・高台径3.5cm。

②杯II類（第6図23・24）：II類の高足杯（馬上杯）には、脚部や身部の状況から大振りのものと小振りのものが存在する。大振りのものをA種とし、小振りのものをB種とした。特にB種の小振りの杯は身部の外底面を尖らせ気味に成形した後で個別に製作した脚部を貼り付けて完成させたものとして考えられた。

杯II類A種（第6図23）：大振りの高足杯の中空の脚とみられる資料で、呉須で脚中央部と脚の下位に「界線」と「竹葉文」をそれぞれ描いているものである。同図23の脚下部の高台径は、3.8cmと求められた。



第6図 明青花 碗(14~20)・杯(21~24)・鉢(25)・皿(26~29)

杯Ⅱ類B種（同図24）：小振りの外反口縁の高足杯である。胴部と内底面に「宝相華唐草文」や「草花文」を描いている。同図24の推算口径は8.8cmであった。

C. 鉢（第6図25）

口径の推算が25.3cmと求められた大型の鉢（推定器高11.1cm・推定高台径10.7cm）が1点のみ得られている。口縁が外反するタイプの大鉢である。胴部に呉須で「雲堂手」で人物や風景を描く。内面の口縁には「四方襷文」を描き、内底面に「雷文」を描いているものである。

D. 皿（第6図26～28）

皿の器形的な特徴として、腰部で丸味を持った外反口縁の皿と腰部で「く」の字状に屈曲する外反口縁の皿がある。前者をI型として位置づけて、後者のものをII型として二種類に分類した。II型の皿については屈曲の度合いからa種とb種の二つに細分した。

①皿I型（同図26）：I型の皿は器厚や高台が薄く仕上げられたもので、高台がやや内側に閉じ気味に成形されている。文様は外面の胴部に「宝相華唐草文」、内面口縁には「四方襷文」を描いている。内底面には靈獸の「麒麟」を主文に描き、周辺に「松」「如意雲」「月」「草」を描いているものである。同図26の復元されたサイズは、口径20.0cm・器高4.4cm・高台径12.1cmを求めた。

②皿II型（第6図27・28）：厚手の皿で腰部が屈曲するものをII型とした。腰部の折れ具合で、屈曲のきついものをa種（同図27：推算されたサイズは、口径18.6cm・器高5.5cm・高台径6.7cm）とし、ゆるいものをb種（同図28：推算されたサイズは、口径17.2cm・推定高5.0cm・推定高台径6.0cm）とした。外面胴部の文様は、a・bの二種とも「唐草文」を描く点で共通しているが、内面の口縁の文様ではa種が「雷文」を描き、b種は「四方襷文」を描いている。

E. 盤（第6図29）

鍔縁盤が一点のみ得られている。外面胴部に「宝相華唐草文」を描く。内面の口縁に「唐草文」、内底面は二本の陽圏線と圏線で文様を区画し、区画内に「竹葉文」「草文」などを描いている（同図29：推算口径18.0cm・器高2.3cm・推算高台径11.0cm）。

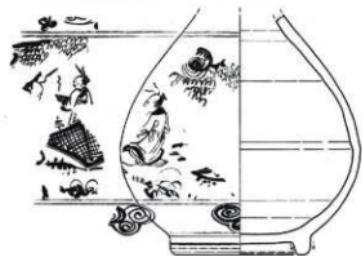
F. 瓶（第7図30～36・第8図37）

瓶は便宜的に小瓶と大瓶の二種類に大別した。前者の小瓶はいわゆる「玉壺春瓶」であり、後者の大瓶は「梅瓶」と「花瓶」である。小瓶の「玉壺春瓶」については胴部の主文様からI類とII類に分類し、主文様以外の文様などの構成からa種からc種までの三種に細分を試みた。

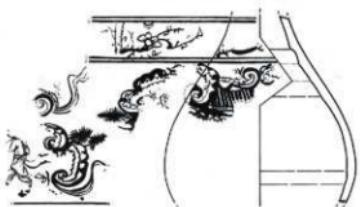
イ. 小瓶（同図30～36）：玉壺春瓶を仮称して小瓶として取り扱ったものである。復元資料は得られていないが、文様や底部資料などから推定された個体数は10個体程度であった。胴部への主文から「雲堂手」と「宝相華唐草文」の二種類に分類し、「雲堂手」の主文のものをI類、「宝相華唐草文」を主文とするものをII類とした。その他に底部資料が4点得られている。

①小瓶I類（同図30・31）：I類の小瓶は胴部の主文様が「雲堂手」を描いているもので2点（同図30・31）が出土している。同図30の高台径は8.6cmと求められている。

②小瓶II類（同図32～34）：II類は胴部の主文様が「宝相華唐草文」を描き、胴上部に「芭葉文」



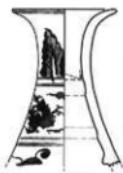
30



31



35



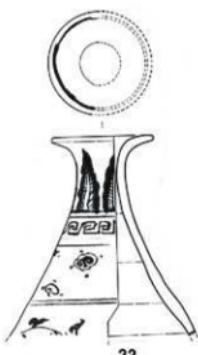
32



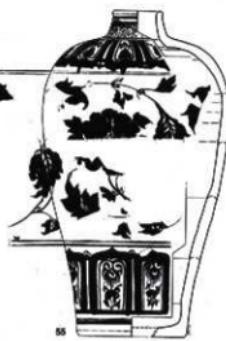
34



36



33



36

第7図 明青花 瓶(30~34・大瓶(35・36)

を描いているものである。頸上部の「芭葉文」直下の文様の組み合わせから a 種から c 種の三種に細分した。

II類 a 種（同図 32）：頸上部の芭葉文帯直下に「唐草文」を描いているもの。推算口径は 6.5cm。

II類 b 種（同図 33）：頸上部の芭葉文帯直下に「雷文」を描いているもの。推算口径 4.6cm。

II類 c 種（同図 34）：頸上部の芭葉文帯が欠いているが、界線直下に「梵字」様の文様を描いているもの。

口、大瓶（第7図 35・35、第8図 37）：大瓶として分類したものは、梅瓶と花瓶の二種類である。梅瓶は 2 個体出土していて、いずれも宝珠玉状の撮が貼付られた蓋が 2 個出土している。花瓶は頸部に輪っかを衛えた獅子面を貼り付けたものが 1 個体出土している。前者の梅瓶を I 型とし、後者の花瓶を II 型とした。

①大瓶 I 型（第7図 35・36）：I 型の梅瓶は蓋と身が文様構成やサイズなどが合致している。蓋の文様は蓋甲上に「如意頭文」、蓋外面は「唐草文」を描いている。身の口縁部に「亀甲繋ぎ文」、頸部直下に下向きの「ラマ式蓮弁文」を描いていて、底面近くから上向きの「ラマ式蓮弁文」を腰下部まで描いている。胴部中央の主文は柄の「宝相華唐草文」を描いている。同図 35 の蓋下端の復元直径 9.0cm、器高は推定 8.4cm、身部の復元されたサイズは、口径 5.5cm・器高 35.9cm・底径 11.8cm。同図 36 は蓋下端の復元直径 9.1cm、器高は推定 8.4cm、身部の復元されたサイズは、口径 5.5cm・器高 35.2cm・底径 12.3cm。

②大瓶 II 型（第8図 37）：頸部に輪を衛えた獅子の面を貼り付けた双耳（把手）の花瓶である。口頸部は盤口となっていて、外反させた後に口縁のみをほぼ垂直に形成した口造りとなっている。腰下部から底面近くまでの形状も口頸部の形態に近似し、腰下部で一旦窄まった後で漸次、下位は外側に開いて途中でやや内側に締まり気味に直に近い状態で底面まで移行している。

文様は口縁に「如意雲」、頸上部が「芭葉文」を描く。頸部中央には「唐草文」、頸下部が下向きの「芭葉文」を描く。胴部の主文は「梅」と「松」の樹文を描いている。腰部から下は「波瀾文」「芭葉文」が展開されているようである。獅子衛の輪は肩部近くから貼付られている。同図 37 の復元されたサイズは、口径 14.0cm・器高 41.4cm・底径 12.8cm を求めた。

G. 壺（第8図 38～41）

小型壺と大型壺の二種類が確認されている。小型の壺は 2 個体分が存在し、大型壺は 1 個体分出土している。他に大型壺に被さる蓋が 1 点得られている。小型壺を I 型壺とし、大型壺を II 型として二つに分類した。

①壺 I 型（第8図 38・39）：I 型は外面の文様などから A 種と B 種の二種類に細分した。

I 型 A 種（同図 38）：口頸部に界線を施し、界線直下に間弁を持った蓮弁を下向きに描く。胴部に「宝相華唐草文」を描いて主文とする。同図 38 の復元されサイズは、口径 6.2cm・器高（10.2cm）・底径 6.4cm であった。

I 型 B 種（同図 39）：頸部直下から丸彫りの「蓮弁文」を底面近くまで施したものである。同図 39 の復元されサイズは、口径 6.8cm・器高（10.8cm）・底径 6.2cm であった。

②壺 II 型（第8図 40・41）：いわゆる酒会壺と称されているグループに所属する大型壺である。



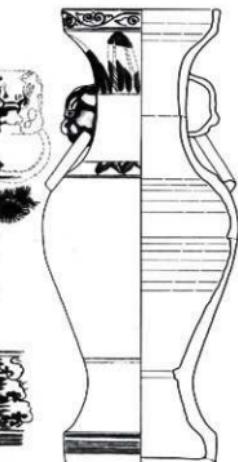
38



39

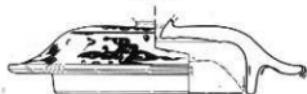


40



37

0 10cm



40

0 10cm



41

第8圖 喬南花 大瓶(37)~壺(38~41)

蓋（同図40：鉢縁直径 26.0cm・内側縁部の直径 17.4cm）と身（同図41：口径 22.6cm・器高 37.3cm・底径 20.9cm）が各々一点ずつ出土していて両者は文様や身と蓋の噛み合いなどから別種のものとみられる。蓋（同図40）は甲の頂周に14弁花の「捻じ花」を撮の周辺に展開させ、甲の下周に「如意頭雲文」を描いている。身（同図41）の文様は口頸部に「波瀾文」、肩上部は八宝を内含する逆さの「ラマ式蓮弁文」を描いている。腰下部にも「ラマ式蓮弁文」を描いている。胴部には主文となる「牡丹唐草文」を大きく描き出しているようである。

以上が平成6年度の京の内の倉庫跡から出土した明青花である。近年の主な研究成果を以下に記す。特に亀井明徳は「首里城京の内出土陶瓷器－15世紀前半代の標準資料－」（註19）で京の内出土の陶磁器資料について、詳細な分析や検討をおこなっているので、亀井の研究成果を掲載することにした。亀井は、「沖縄県那覇市首里城跡・京の内 SK01 土壌検出の中国・タイ・ベトナムなどの陶壺は、明代の15世紀前半の良好な標準遺物として認定できる。これらの陶瓷器が、15世紀前半に生産ないし流通していたとする根拠を明確にしたい。〈略〉明代前半期の景德鎮窯製の青白瓷器は（以下青花瓷と略す）は、ここ数年間の同・玉山御窯廠関連遺跡の発掘調査によって明らかになりつつある。とりわけ、洪武・永樂・宣德・すなわち14世紀第4四半期から15世紀第2四半期を前後する時期の、官窯青花瓷の具体的な状況が、かなり鮮明になった。しかし、宣徳以降、成化以前については、年款銘遺品がきわめて少數であるため、いぜんと「空白の30年」などと表現されている。すなわち、15世紀第2四半期から中葉におよぶ正統（1436～）・景泰・天順（～1465）にいたる期間の状況は不鮮明である。これらは、主として官窯青花瓷についての状況であり、これを民窯青花瓷について広げると、的確な資料不足は否めぬ〈略〉と記している。改めて、1459年の火災で焼失した京の内倉庫跡出土の陶磁器が「空白の30年」と表現される正統（1436～）・景泰・天順（～1465）の時期に該当し、陶磁器研究において重要な資料であることが理解された。

次に亀井は、京の内 SK01 検出の青花瓷で官窯瓷器との影響関係などを考慮しながら年代の手がかりとなる資料を摘出している。以下、亀井が摘出した資料と根拠などを略記する。便宜的に京の内跡発掘調査報告書（I）（註20）の器種毎に発表要旨の通し番号を冠した。また、亀井論文に記載された陶磁器名称を尊重し、掲載文は「」で表記した。さらに亀井が時期決定の根拠とする主要部分を掲載する。なお、文中の（ ）内の遺物番号は、発表要旨の番号と一致させ、必要に応じて遺物番号を追記した。

1. 青花碗（第5図1～13、第6図14～18）：「SK01 検出の碗に共通している特徴は、腰を丸く張り、外反口縁で、低い高台は内傾ないし直立であり、外側には開かない。文様は、外側面上に牡丹ないし宝相華唐草文・如意頭文・三共文など、内底に梅月文・牡丹文・雲文・草花文・「福」字など、口縁内外に四方繫文・2連ないし反転雷文・バスバ文字などを描くことを特徴とし、直口口縁碗（第6図19・20）も施文が共通している。やや大型碗（鉢）では（第6図25）、人物文と腰に蓮弁文を描くものや、小型品および高足杯も同様の形状（第6図21・24）で、施文は類似している。第6図26の皿もこれらに組み合わさる共通した意匠である。」とし、京の内 SK01 出土の青花碗について、亀井は「南京・明故宮玉帶河調査によって、1964年にまとまって発見され、景德鎮東下流域窯群で生産された永樂・宣徳期民窯の製品と考えられる（南京博物院 1976、梁白泉他 1996）。〈略〉年代設定の根拠は、同一層位から出土した官窯瓷器に依拠している。〈略〉これらの民窯製碗の原形として想定されるのは、一連の「宣徳年製」款銘品である。

例えばオックスフォード・アシュモアーン博物館 X1409 やデビッドファンデーション美術館〈略〉No.682 の青花碗などでは、体部に宝相華唐草文、口縁に反転雷文帯と菊花唐草文帯、高台の唐草文の施文がされている。SK01 検出品は、この種官窯様式を原形として、個々の文様の簡略化と高台などの文様すべての消去などがなされたものといえる。」とし、紀年名銘墓出土品では、「景德鎮市北郊觀音閣劉家・舒母袁竜真墓（景泰 7 年・1456）出土の碗 2 点では、巻雲蘭草「福」字銘文と巻雲蘭石文品が同一形態で、文様も近い（文物 1981-2, pp46-50）。〈略〉SK01 検出品と共に通する要素をもっているが、上記の南京・明故宮玉帶河出土品がより類似性がつよい。

承楽・宣徳に該当する時期の紀年銘墓に良好な資料の出現が期待されるところである。

なお、（第 6 図 25）の鉢は、「同じ高士巻雲文の意匠の破片が景德鎮湖田窯の明代中前期層から出土している（景德鎮 1992,no.296）。この形式の碗は、〈略〉梅月文碗がある（出光美術館 1984）。わが国においては、和歌山・友ヶ島沖引き揚げ品、山梨県新巻本村遺跡などから発見されており、わが国出土の明代青花のなかで年代的に遡るものであることを指摘した（亀井明徳 1980）。なかでも友ヶ島沖引き揚げの梅月文碗〈略〉は、第 5 図 8 などに類似しており、青瓷碗なども SK01 の出土品とその特徴を共通しており、平行した年代が想定できる（和歌山市 1997）。〈略〉さらに、フィリピン・パンダナン島沖沈没船から、類似した青花碗・皿・罐などが、青瓷稜花盤・櫛目文盤などと組みあわさって発見されており、SK01 と類似した器種構成である（森村健一 1996）。」

2. 青花牡丹文梅瓶（第 7 図 35）：「胴部下半をほとんど収斂させないこの形態は、宣徳以降の梅瓶に通有である。頸部には亀甲文を細かくいれ、胴部に描かれた牡丹唐草文は、〈略〉牡丹文罐（第 8 図 41）と同じ手法であり、同時期の作とみる。肩と腰にえがかれた蓮弁文は、間弁を入れ、縱長で尖頂形にするところは宣徳期のそれに類似しているが、ここでも垂下文の下半に

5 本の流れをつくる意匠は、トクカブの至正タイプ牡丹文梅瓶（TKS15/1370）や瓢箪型八角瓶（TKS15/1473）などに近似文があり、從文の部分に古式なスタイルをのこしている。」

3. 獣首を受けた松竹梅文双耳花瓶（第 8 図 37）：「類例がすぐないが、デビッド財団美術館（PDF680）の弘治 9（1496）年銘品およびほぼ同時期と考えられる V&A 品（器高 60.0cm）などと比較すると、あきらかに先行している。頸部の蕉葉文は白抜き葉脈の外周に二重に葉文をつくり、主文は、基部から分枝する梅樹と、松・竹を組みあわせたとみられ、いずれもかなり異形であり、いかにも民窯の意匠といえよう。脚部の波済文は、横位置に描いており、波頭の左に渦巻く波文を配置する構図で、いわゆる雲堂手にみられ、北京市文物研究所所蔵の青花携琴訪友図罐（器高 36cm）の肩部に類似例をみいだせる（周鑒書 1998）。これは天順年間の作と推定され、この腰にも二重蕉葉文がみられる。」

4. 小型の唐草文罐（第 8 図 38・39）：「類例品は、江西・新建県の朱盤試墓出土の 5 件の青花罐の中に入られる。そのうちの 1 点（〈略〉、器高 19.5cm）の肩に描かれた線描蓮弁文と胴部の牡丹唐草文が類似し、腰の文様は、〈略〉底部破片の渦巻き状の雲文である。この墓主は、正統 14（1449）年に葬せられている（文物 1973-12, pp.64-66）。同じく、廣東・東莞市篁村・羅亨信墓（天順 1・1457 年没）隨葬の罐 2 点（器高 16.6-17.3cm）も類似している（文物 1991-

11, pp.46)。さらに、第8図39は小品であるが、南京市牛首山弘覺寺塔基墓出土の4点の青花蓋に類似しているようである(南京博 1981)。この墓主は、正統年間(1436-50年)に建立された。したがって、これら小型罐の年代は、紀年銘墓出土資料からみると、15世紀第2四半期前後の年代幅のなかにおさまると云えよう。」

5. 青花牡丹文罐(第8図41):「瓶口撫肩広口形で腰をしぶり、わずかに外反させる。外底はあさく内抉りして露胎であ、内面はうすく施釉されている。これらの特徴は至正タイプを踏襲し、文様においても、口縁部の波濤文、肩にはラマ式蓮弁内に、便化した垂下文の形も、〈略〉青花梅瓶と同巧意匠で、元青花壺の配置にみられるものである。しかし細かくみると、その半円形の波濤文は、宣徳在銘品のそれと類似し(国立故宮 1998, No.37)、胴部の牡丹唐草文の葉文は葉脈を白く抜き、葉端を尖らす筆致も、珠山出土の宣徳在銘の罐の表現をうかがわせる(大阪東洋陶磁 1995)。青花牡丹唐草貼花蟠螭文瓶(馬希桂 1999.205図)の花・葉の表現との類似性がよりつよくみられる。したがって本品は、至正タイプの從文などの部分では、形式的には残してはいるものの、宣徳期ないしそれ以降の民窯の製品と考える。また、罐蓋(第8図40)の捩花の周間にめぐらされた十字型雲文は、宣徳期あるいはそれ以後と考える。」

4. おわりに

平成6年度の京の内倉庫跡の発掘調査で、一括廃棄された大量の陶磁器片を検出した直後に国内の陶磁器の編年研究において重要な一級資料を発掘してしまったと身震いがしました。これで陶磁器研究が進展すると心の中で感じながら陶磁器片のみが堆積(層厚: 50 ~ 60cm)した層の発掘調査をしました。倉庫跡を完掘して間もなく、倉庫跡SK01から大量の陶磁器片が発見されたとの情報が亀井明徳先生に伝わり、京の内の倉庫跡を含めた京の内一帯の調査区内の調査状況や検出された遺構を熱心に聞き取って下さった様子が目に浮かびます。

さて、京の内倉庫跡SK01出土の元・明青花については、刊行された発掘調査報告書(I)・(II)(註21)を基本にして図面を示したが、編年的な位置づけや類似資料などの調査研究は、亀井明徳先生を中心とする九州古瓷研究会の会員を中心に詳細な研究を行っている(註22)。亀井らの研究成果により、あらためて首里城京の内跡SK01出土の陶磁器類(1459年の失火で消失した倉庫跡から一括廃棄された資料。1,162個体)が、15世紀前半代の標準資料として位置づけられ、沖縄県内を初め国内外の貿易研究に大きく寄与していることは、まぎれもない事実である。

最後に平成10年度に刊行された京の内発掘調査報告書を執筆する際に陶磁器関係の文献資料が限られ、文献資料を模索し、或いは元東京国立博物館次長の長谷部楽爾に資料の提供(紅釉水注、ベトナム青花花唐草文面取瓶などの類例資料)をいただきながら原稿執筆と平行して陶磁器の分類接合を自らおこなった。結果として、自身でも95個体前後が復元できた。その中で石膏復元で難易度の高い元青花馬上杯(第3図9)や明青花双耳花瓶(第8図37)および紅釉水注などの特殊で異質な資料については自身で石膏による復元をおこなったことが記憶の中から蘇りました。

註文献

註1. 沖縄県教育委員会『祭温本中山世譜』1986年。

- 註2. 日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成 明實錄之部1』国書刊行会 1979年。
- 註3. 沖縄県文化財調査報告書 第132集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)』沖縄県教育委員会 1998(平成10)年3月。
- 註4. 重要文化財指定記念 特別企画展『首里城京の内展-貿易陶磁からみた大交易時代-』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月 (表紙見返しに復元された293固体を掲載)。
- 註5. 註3と同じ。
- 註6. 註3と同じ。
- 註7. 矢部良明「元の染付」『陶磁大系』第41卷 (グラビア版 46 青花 蓮池図大盤) 平凡社 1980年。
- 註8. 註7と同じ (グラビア版 47 青花 鶴鳴図大盤)。
- 註9. 註7と同じ (グラビア版 49 青花 双鷺文大盤)。
- 註10. 藤岡一『世界陶磁全集』第11卷 (原色版 2 元 青花龍文高足杯。高足杯のサイズは高さ 11.0cm、口径 13.2cm、底径 4.4cm.) 河出書房 1955年。
- 註11. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2009(平成21)年3月。
- 註12. 新島奈津子・高島裕之・亀井明徳・柴田圭子「04 首里城跡 沖縄県当蔵3丁目1番」
『亞州古陶磁研究Ⅲ』亞州古陶磁学会 2008年9月。
- 註13. 亀井明徳『首里城京の内出土陶器-15世紀前半の標準資料-』重要文化財指定記念 特別企画展
『首里城京の内展-貿易陶磁からみた大交易時代-』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月。
- 註14. 新島奈津子『古琉球出土元青花瓷の研究』『亞州古陶磁研究IV』亞州古陶磁学会 2009年3月。
- 註15. 亀井明徳「首里城京の内展によせて/貿易陶磁から見た大交易時代/新領域開く力強さ/世界でも珍しい一品
/元青花大合子」琉球新報 2001(平成13)年3月27日火曜日 文化面。
- 註16. 註12と同じ。
- 註17. 註3と同じ。
- 註18. 藤岡一『明の染付』『陶磁大系』第42卷 平凡社 1980年 (頁96・97参照)。
- 註19. 註13と同じ。
- 註20. 註3と同じ。
- 註21. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2009(平成21)年3月。
- 註22. 註12と同じ。

亀井明徳論文の参考文献

- ※葉佩藍 1998 : 葉佩藍『元代陶瓷』九洲圖書出版國,北京
- ※ Lee J.G. 1950 : Lee J.G. Ming Blue and White, No.8. The Art Institute of Chicago, Chicago
- ※景德鎮陶研 1992 : 景德鎮市陶藝考古研究所所長片『景德鎮出土陶瓷』香港大學馮山博物館,香港
- ※国立故宫 1984 : 国立故宫博物院編『明代初年盜賊特展目錄』No.27. 国立故宫博物院,台北
- ※香港學術館 1989 : 香港藝術館編『景德鎮珠山出土永樂宣德官窯瓷器展覽』No.67. 香港市政局,香港
- ※南京博物院 1976 : 『南京明故宮出土洪武時期瓷器』文物 1976.8 pp.71-75.
- ※馬希桂 1999 : 馬希桂『中国青花瓷』205圖,上海古籍出版社,上海
- ※梁白泉他 1996 : 『朱明遺草-南京明故宮出土陶瓷』No.73-94. 南京博物院・香港中文大學文物館,香港
- ※出光美術館 1984 : 出光美術館編『陶磁の東西交流』190圖 No.126・127, 出光美術館, 東京
- ※亀井明徳 1980 : 亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」「日本貿易陶磁史の研究」所収,pp.298-334. 同朋舎出版,1986,京都
- ※小野正敏 1982 : 「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」貿易陶磁研究2. pp.71-87. 日本貿易陶磁研究会, 東京
- ※森村健一 1996: 森村健一「フィリピン・パンダナン島沖沈没船引き揚げ陶磁器」貿易陶磁研究 No.16. pp.112-125. 日本貿易陶磁研究会, 東京
- ※周鑒書 1998 : 周鑒書 1998 主編『中国歴代景德鎮瓷器 明巻』pp.144. 中国撮影出版社, 北京
- ※南京博物院 1981 : 南京博物院他編『南京博物院展』No.115. 名古屋市博物館他,名古屋
- ※国立故宫 1998 : 国立故宫博物院編『明代宣德官窯青花特展図録』国立故宫博物院,台北
- ※大阪東洋陶磁 1995 : 大阪市立東洋陶磁美術館編『皇帝の磁器-新発見の景德鎮官窯』 No.61.
- 大阪市立東洋陶磁美術館, 大阪

中国の青花磁器

沖縄県立芸術大学

もり たつや
森 達也

1 中国での白地にブルーの最初のやきもの

7世紀中頃の唐三彩

2 唐青花

揚州出土唐青花

インドネシア・黒石号沈没船（9世紀前半）引き上げ唐青花

生産地：河南省鞏義窯（黄冶窯、白河窯で生産確認）

3 本格的な青花磁器誕生

元王朝（1279-1367年）

モンゴル人の治世下で、景德鎮窯で生産開始 至正年間（1341-1367年）

モンゴル人によってイランから持ち込まれたコバルト顔料利用

意匠もペルシアの影響が強い

吉州窯からの影響も

*顔料：回青（イスラーム圏からの輸入）

4 青花の変質

明王朝（1368-1644年）

洪武年間（1368-1398年） 青の発色の悪い青花 西方からのコバルトが枯渇（釉裏紅が隆盛）

永楽年間（1403-1424年） 鄭和の艦隊による東西交流の再開

上質のコバルト流入により青の発色向上

鄭和艦隊により西方に大量輸送（トルコ・トプカプ宮殿、イラン・アルダビール廟など）

*顔料：蘇麻離青（イスラーム圏からの輸入、永楽、宣徳、成化前期）

宣德年間（1426-1435年） 官窯製品に青花による年款が書き込まれるようになる

*宣徳と成化の間の時期は青花生産低調：空白期と呼ばれる

成化年間（1465-1487年） 官窯製品はやや淡い色のコバルトによる精緻な青花

*顔料：塘陂青（江西饒州府平樂県で産出、成化後期～正徳）

正徳年間（1506-1521年） 官窯でアラビア字文の青花が生産

*顔料：無名子（石子青）江西上高県天則崗で産出、正徳～嘉靖

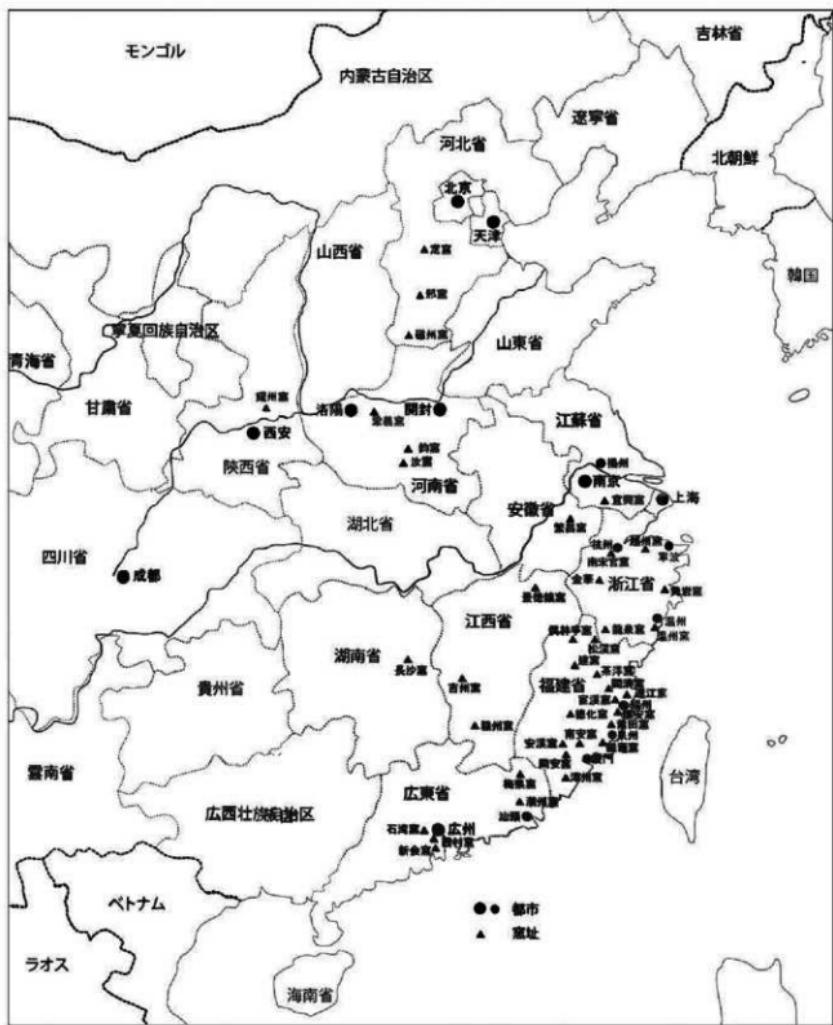
嘉靖年間（1522-1566年） 後半期には文様などが粗放化

*顔料：回青、イスラーム圏の青料、雲南で入手との伝説

万暦年間（1573-1620年） 技術的には粗放化、輸出製品を生産する民窯が発展

*顔料：浙青（浙江省で産出）万暦～清朝

天啓年間（1621-1627年） 官窯は衰退し、民窯が発展



中国窯址分布図

日本の染付

長崎大学
の がみ たけのり
野上 建紀

1 日本の染付の誕生と中国青花

1 肥前陶磁（肥前＝現在の佐賀県・長崎県（壱岐・対馬を除く）

- ・肥前磁器＝伊万里（焼）、主要生産地：有田・波佐見・三川内、主要積出港：伊万里
- ・肥前陶器＝唐津（焼）、主要生産地：伊万里・武雄、初期の積出港：唐津

2 文禄・慶長の役と肥前陶磁

- ・やきもの戦争＝萩焼、上野・高取焼、薩摩焼

3 朝鮮半島の技術と唐津焼

- ・焼成技法（目積み）、装飾技法（象嵌・鉄絵・刷毛目）、窯道具、窯構造

4 肥前磁器のはじまり

- ・染付の顔料（呉須）、中国より輸入、絵葉

5 意匠・文様・器形の模倣

- ・初期伊万里、輸出用伊万里など。江戸時代を通して模倣。「大明成化年製」銘など。



図1 肥前地区周辺地区

II 世界に輸出された日本磁器

1 明清王朝交替と「伊万里」の海外輸出

- ・鄭成功による清への抵抗→海禁令（1656）→中国磁器の海外輸出の減少

2 「伊万里」の海外輸出港と輸出の担い手

- ・長崎（出島、唐人屋敷、新地荷藏など）

- ・唐船：もっぱら東南アジア

- ・オランダ船（VOC）：アジア各地の商館、バタビア～ケープタウン～オランダ本国

3 もう一つの海外貿易ルート

- ・マニラ・アカブルコ間のガレオン貿易

- ・マニラ（スペインのアジア側拠点、イントラムロス）：1571年建設

- ・台湾（鄭成功一派の拠点）

- ・メキシコ（ヌエバ・エスパニョーラ副王領の首都）

- ・グアテマラ、ハバナ、ペルー、コロンビア

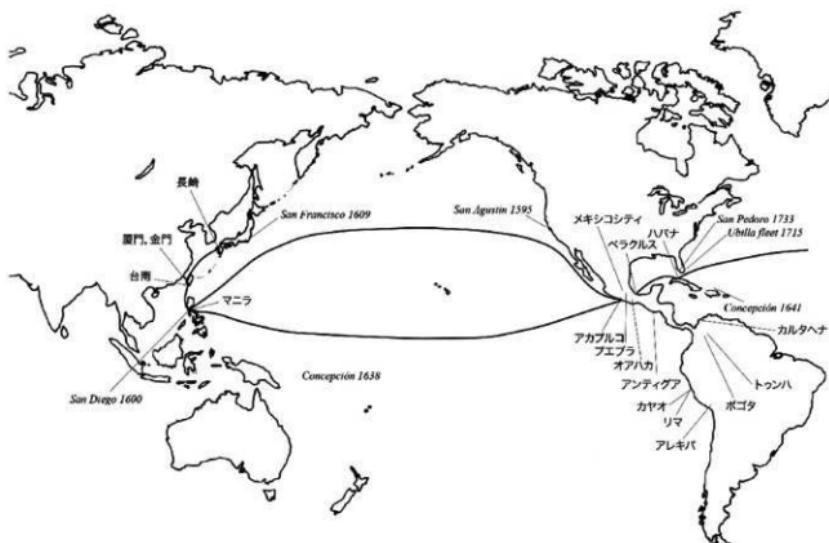
4 ラテンアメリカ発見の「伊万里」の特質

- ・染付芙蓉手皿（ヨーロッパ世界共通の需要）

- ・チョコレートカップ（スペインなどで発見されるカップ類の多くがチョコレートカップ）

5 ラテンアメリカの陶器生産に影響を与えた染付

- ・プエブラ陶器の白釉藍彩陶器



<メモ>

ギャラリートークのご案内

専門員が、首里城京の内跡出土品展「憧れの青花」について展示室で解説します。

- 開催日 ① 4月 1日(土) ② 4月 8日(土)
③ 4月 15日(土) ④ 4月 22日(土)
⑤ 5月 6日(土) ⑥ 5月 13日(土)

時 間 14:00～14:30

会 場 企画展示室 ※予約不要・参加無料

まいコレ



埋文イチ押しの出土品を

月替わりでご紹介！

2017年4・5月は

りゅう えん きょう
龍淵橋の
は め いし
羽目石 !!





平成29年度の催し

- 沖縄の戦争遺跡パネル展

平成 29 年 6 月 6 日(火)～25 日(日)

- 発掘調査速報展 2017

平成 29 年 8 月 1 日(火)～9 月 3 日(日)

※8 月 5 日(木)、12 日(木)に関連文化講座を予定

- 沖縄の先史時代展（仮題）

平成 29 年 10 月 24 日(火)～11 月 26 日(日)

- 首里城京の内跡出土品展

平成 30 年 2 月 20 日(火)～5 月 13 日(日)



沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

入所無料

TEL : 098-835-8751 FAX : 098-835-8754

開所時間：午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

休 所 日：月曜日、国民の祝日（子どもの日、文化の日は開所）、慰靈の日、年末年始、※月曜が祝日の際は、翌火曜も休所